

研究活動

藤吉圭二

著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表の 年月	発行所、発表雑誌 又は 発表学会等の名称	概要	編者・著者名 (共著の場合のみ記入)	該当頁数
(著書) 1. 『日仏社会学叢書(第2巻) フランス社会学理論への挑戦』	共著	2005. 3. (平成17年3月)	恒星社厚生閣	モースは主著というべき「贈与論」をはじめいくつかの論文で「全体的人間」という概念を提起している。これは膨大な民族誌上の知見を踏まえた概念であるが、特徴的なことは、これがいわゆる原初的な社会に生きる人間のみならず、近代化された社会においても一般的な人間像であるとモースが捉えていた点である。合理的な選択に基づいて行動する近代的な人間像が、めざすべきものとしても、現状を説明する道具としても不十分性を露呈しつつある現代において、モースの提起した「全体的人間」像の有効性を確認した。(第二章「モースの社会学理論—全体的人間と社会連帯」)	編者：大野道邦 共著者：大野道邦・藤吉圭二・山下雅之・前田至剛・菊谷和宏・池田祥英・中島道男・横山寿世理(掲載順)	79-95頁
2. 『現代文化の社会学 入門』	共著	2007. 4. (平成19年4月)	ミネルヴァ書房	モースが「贈与論」で展開した考察を踏まえ、現代の贈り物にかかわる事象を考察するための視点を整理して提示した。贈り物については、そのやりとりのなされる時点での贈る・受けとるという行為を見るだけでなく、その贈り物がどのような経緯でなされるにいったかという過去への視点、およびその贈り物がその後の当事者にどのような影響を及ぼしたかという未来への視点をもつて見るのが重要であり、それによって社会を構造的に理解することが可能になってくることを示した。(第五章「贈り物—人はそれに何をこめるのか」)	編者：小川伸彦・山泰幸 共著者：名部圭一・澁谷知美・山田陽子・菅康弘・藤吉圭二・須藤廣・大淵裕美・山泰幸・足立重和・寺岡伸悟・工藤保則・森真一・真鍋昌賢・小川伸彦(掲載順)	27-52頁
3. 『社会学ベーシックス1 自己・他者・関係』	共著	2008. 10 (平成20年10月)	世界思想社	モースが「贈与論」で展開した「全体的給付の体系」という概念について整理し、その体系が典型的なものと同質的なものへと分類されていることに着目し、物質的な豊かさの進行に伴う社会構造の複雑化が社会関係に根本的な影響を与えることを示した。すなわち、社会関係において重要な贈与という行為において、典型的体系では「されたか/されなかったか」という二値的な、いわば判断の容易な評価基準が適用されるのに対し、競争的体系では「十分か/不十分か」という当事者間での合意にしばしば困難を伴う評価基準が適用され、この点が「友好の確認でありながら、その友好を動揺させる性格を含みもつ」贈与という現象に対する考察が、モースのなした民族誌的フィールドだけでなく、現代社会の諸問題の検討においても有効性をもつことを示した。(16「贈与M. モース「贈与論」」)	編者：井上俊・伊藤公雄 共著者：田中紀行・井上俊・石川実・草柳千早・片桐雅隆・加藤一己・細辻恵子・織田年和・立木康介・亀山佳明・磯部卓三・今井信雄・那須壽・山田富秋・永谷健・藤吉圭二・新陸人・土井隆義・山田真茂・留・崎山治男・丸田健・柏端達也・長谷正人・吉田純	159-168頁

<p>4. 『アーカイブズ情報の共有化に向けて』</p>	<p>共著</p>	<p>2010. 2. (平成22年2月)</p>	<p>岩田書院</p>	<p>オーストラリア・ヴィクトリア州の公文書管理は、植民地統治業務に関する本国イギリスへの報告の必要という事情から始まった。それが19世紀から20世紀へと世紀をまたぐあたりから、入植第一世代の高齢化、オーストラリア国家の部分的な独立などを背景として自国史や国民としてのアイデンティティの意識が高まり、それが政府の記録管理の整備を後押しした。しかし特に現用を終えた政府記録については原簿、図書館、政府アーカイブズ機関のいずれが保管の責任をとるのか、また、保管による利用を保证するための現用時点での記録管理システムを政府内部にどのように浸透させるのかについて様々な問題が指摘され、それらの解決が一つひとつはかられた。 (第2章「政府のアカウントビリティとアーカイブズ—20世紀前半のヴィクトリア州公文書管理を事例として」)</p>	<p>編者：国文学研究資料館アーカイブズ研究系 共著者：安倍尚紀・藤吉圭二・坂口貴弘・大友一雄・森本祥子・青山英幸・吉田千絵・玉島敏芳・丸島和洋・村越一哲</p>	<p>41 - 56 頁</p>
<p>(学術論文)</p> <p>1. モーアの「全体性」概念の検討—「贈与論」を契機として</p> <p>2. 「敵意」に転化する「好意」—「贈与論」における「気前のよさ」をめぐる</p> <p>3. 現代における「全体性」のかたち—モーアにおける「人間」観の検討</p> <p>4. 労働に関する歴史社会学的研究の概観—戦後日本の展開を中心に</p> <p>5. 現代社会における「贈与の道徳」—モーア「贈与論」における社会的提案の検討</p>	<p>単著</p> <p>単著</p> <p>単著</p> <p>単著</p> <p>単著</p>	<p>1994. 3. (平成6年3月)</p> <p>1995. 10 (平成7年10月)</p> <p>1995. 12 (平成7年12月)</p> <p>1997. 12 (平成9年12月)</p> <p>1999. 2. (平成11年7月)</p>	<p>『京都社会学年報』 第1号 京都大学文学部社会学研究室</p> <p>『ソシオロジ』 第40巻2号 社会学研究会</p> <p>『京都社会学年報』 第3号 京都大学文学部社会学研究室</p> <p>『京都社会学年報』 第5号 京都大学文学部社会学研究室</p> <p>『高野山大学論叢』</p>	<p>モーアが「贈与論」において提起した「全体的社会事実」という概念は、「贈与論」のみではその内実の把握がむずかしい。本論では、モーアの他の論考を参照することによって、「全体的社会事実」概念の明晰化を試みた。</p> <p>モーアの「贈与論」において整理のむずかしい概念のひとつに「気前のよさ」がある。本論では、モーアにより「贈与の義務的三原則」として定式化された贈与・受容・返礼がその有無を二値的に判定できる(行為)であるのに対して「気前のよさ」がそういった判定の困難な、むしろ人間の社会関係に「それで十分かどうか」という計量可能性を持ちこむような(態度)であることを指摘し、そういった視点から「贈与論」を再検討する必要性を提起した。</p> <p>民族誌学上の資料を駆使して展開されるモーアの「贈与論」は一方で、そこから得られた知見を現代社会の編成にも応用していこうという側面をも持つ。本論では、従来あまり顧みられてこなかった「贈与論」のこの側面について、その有効性の検討を試みた。</p> <p>製造業を中心とする近代的産業における労働形態に関する研究には膨大な蓄積があるが、本論では、その中から歴史社会学的な視点を含みもつものをピックアップしたうえで、それらを通して明らかにされてきた、日本の近代的労働に特徴的なあり方を考察し整理した。</p> <p>モーア「贈与論」が企てたのは遍く人類の社会に贈与・受容・返礼の義務的三原則が存在することを明らかにすることであった。これを現代社会の編成に適用するにあたっては、もう一つ明らかにされた「気前よく」という原則をどう位置づけるかが問題となる。本論ではこの点の解明を試みた。</p>	<p>83-96頁</p> <p>115-130 頁</p> <p>111-125 頁</p> <p>37-53頁</p> <p>39-55頁</p>	

6. 築90年の国際交流―「国籍・性別不問」京都大学吉田寮の試み	単著	1999. 7. (平成11 年7月)	『ライフ・イベント 語られる留学』 京都大学留学生研 究会	本論は、京都大学留学生研究会が京都大学に在学する留学生を対象にして作成された調査報告の一環として執筆された。筆者が寄宿していた学生寮での留学生との交流を、大学院入試のための日本語学習を中心にまとめ、それとともに学生寮における留学生の地位・身分がはらむ問題点について解明を試みた。	117-141 頁
7. 組織の生成物としての権威―権威の関係主義的確定に向けて(磯村和人著『組織と権威―組織の形成とダイナミズム』書評論文)	単著	2002. 2. (平成14 年2月)	『高野山大学論 叢』 第37巻 高野山大学	磯村和人著『組織と権威』の書評を通じて、近代社会研究の学としての社会学にとって、組織研究がいかなる位置をもつかを検討した。すなわち、いわゆる「共同体からの離脱」が社会における個人の折出・自立を意味する一方で、にもかかわらず「自立した意志をもつ個人」の集合によって形成される組織において個人の意志が制御・抑圧されることについて確認し、そのような制御・抑圧のエージェントとしての「組織権威」の生成過程が本書においては適切に整理されていることを確認し、今後の方向性について展望を示唆した。	103-123 頁
8. 近代社会における「気前のよさ」―モースによる同時代への発言をもとに	単著	2003. 2. (平成15 年2月)	『高野山大学論 叢』 第38巻 高野山大学	モースは「贈与論」で、いわゆる原初的な社会に見られる贈与の義務的三原則の同時代の社会における復権を唱えたが、その議論を彼の妻社会における協同組合運動への取り組みと重ね合わせてみたとき、原初的な社会における「無意識的な気前のよさ」が近代においては「制度化に基づく気前のよさの意識化」という契機の見られることを指摘し、それを通じて原初的な社会の研究を通して近代社会の問題を考察するさいのモースの戦略の特徴を整理した。	41-54頁
9. 現代の四国遍路と接待―歩き遍路の意味	単著	2004. 3. (平成16 年3月)	加賀美智子・村上 保壽・山陰加春夫 (編著) 『遍路学』 高野山大学通信教 育室	四国遍路において接待は古くから見られる伝統的な習俗であるが、特にその現代的な意義について考察した。前近代まで、わが国に暮らす大多数の人々が所属していた伝統的共同体を「私は何者であるか」を説明する必要性の希薄な社会と、対して近代以降、都市化された社会をその必要性が高まった社会と位置づけ、それによってもたらされる緊張を接待が緩和する効果を持つことを論じた。	235-251 頁
10. 現代の四国遍路における「接待」―「配慮無用の親切」という視点から	単著	2004. 3. (平成16 年3月)	『高野山大学論 叢』 第38巻 高野山大学	上記9をさらに敷衍し、四国遍路における接待の現代的意義について弘法大師信仰との関連性を加味して論じた。四国八十八箇所を巡る遍路者は、必ずしも既成の宗教教団の示す指針に基づき教団の示す宗教的階梯を念頭に置いて遍路するものとは限らず、むしろ一人で遍路をつづける中で「わたしのお大師さま」というかたちで同行二人を意識し、それを通じて現実の中で求められる社会的な役割を離脱し、自己との実存的な向かい合いを体験することとなり、この意味で社会的役割に縛られて生きざるをえない現代人にとって、遍路が重要な「浄化作用」を持つことを論じた。	25-40頁

1 1. 高野山古地図を利用した追記可能なデジタル教材の作成	共著	2004. 11 (平成16年11月)	『情報教育方法研究』第7巻第1号 私立大学情報教育協会	歴史的に重要な資料はしばしば貴重な文化財でもあり、現物の利用が従来大幅に制限されていた。こうした歴史的文化的史料をデジタル化し高精細画像での閲覧を可能にすることで、専門家のみならず院生や学部生もそれらを研究の資料として活用できるようになる。さらにデジタル化は貴重資料のインターネット上での公開にも道を開くものである。こうした課題について高野山大学所蔵の高野山古地図を事例として検討し、教育・研究に効果があることを示した。	山陰加春夫との共著	41-45頁
1 2. 電子ネットワーク時代の組織記録 —オーストラリア・ヴィクトリア州のVERSを事例として—	単著	2006. 2 (平成18年2月)	『高野山大学論叢』第41巻 高野山大学	組織の記録は、それが保存・蓄積されると一般にアーカイブズと呼ばれる。公的・私的にかかわらず、組織は自らの活動のなかで記録を生成し、それを蓄積する。その蓄積は、自らの活動の証しとなるものであり、特に公的組織の場合にそれはアカウントビリティの重要な証拠となる。この視点から本論では、インターネットが発達し、電子文書化が進むなかでこのアカウントビリティを確実なものとするためにオーストラリア・ヴィクトリア州が推進するVERS: Victorian Electronic Records Strategy の意義を確認した。		1-21頁
1 3. Cultural Heritage and Digital Technologies: The Case of Koyasan University	単著	2008. 3 (平成20年3月)	Esoteric Buddhist Studies: Identity in Diversity	貴重な文化資源のデジタル化は歴史的・文化的研究への貢献を大いに期待できるということを、以下のようになみつつの場合に分けて論じた。 (1) 古地図など視覚的な資料は、貴重な文化財であるということが妨げとなって集中的な研究の対象となりにくい。それをデジタル化することによって、現物を劣化させる恐れなく、研究対象とすることができる。(2) 寺院文書のように群をなして保存されている古文書類の場合にはEAD/XMLによるデータベース化によって、やはり現物の劣化の恐れなく研究対象とすることができると共に、群としての検索も容易となり、その後の研究の推進に資する。 (3) 上記ふたつのデジタル技術利用に加え、現存しないもの(古墳や建造物、町並みなど)を複数の資料をもとにコンピュータグラフィックスを用いて仮想的に再現することで、現存時の様子を視覚的に確かめることができる。これらのことにより、歴史的・文化的研究へのデジタル技術の適用は、今後さらなる推進が期待される。		361-365頁
1 4. 記録管理を支えるもの—草創期のオーストラリア・ヴィクトリア州を事例として—	単著	2009. 2 (平成21年2月)	『国文学研究資料館紀要 アーカイブズ研究篇』第5号(通巻40号)	オーストラリア・ヴィクトリア州は、その先進的な電子的記録管理政策であるVERSによってアーカイブズの世界では広く知られている。しかしその背景を見ると、そもそも今のオーストラリア国家がイギリスの植民地として始まっていること、それゆえ開拓当初は統治業務に関して本国への報告をする必要があり、そのために記録管理への注意が高かったという事情のあること、そして、時代の経過に伴って本国への報告義務が市民への報告義務へとアカウントビリティの内実を変化させていったことがわかった。		23 - 34頁

<p>15. 過疎地における大量の人口移動を伴う観光事業への取り組み—奄美大島・龍郷町を事例として—</p>	<p>単著</p>	<p>2010. 2. (平成22年2月)</p>	<p>『高野山大学論叢』第45巻 高野山大学</p>	<p>2009年7月の皆既日食に合わせて九州南部の島々では日食観測ツアーが官民挙げて実施された。普段は過疎地とも呼ばれるような場所にテントサイトを設置して大量の観光客を受け入れた。特に有名な観光地として大量の観光客に対処してきた経験を持つわけではない各地においては受入れにまつわるトラブルが危惧され、またそれへの対策が準備された。本稿では奄美大島・龍郷町での皆既日食ツアー観光客の受入れについて、その準備段階、日食ツアー期間中にわたる受入れ側の取組みを、現地のテントサイトに滞在しながら聞き取りも含めた調査を実施し、この地の取組みがいわゆる大規模リゾート開発に頼らない、「身の丈にあった観光事業」の特徴を備えていることを示した。</p>	<p>55 - 70 頁</p>
<p>16. ネットワーク時代のアーカイブズ—アカウントビリティ確保の拠点として—</p>	<p>単著</p>	<p>2010. 2. (平成22年2月)</p>	<p>『アーカイブズ情報の資源化とネットワークの研究』</p>	<p>アーカイブズがアカウントビリティ確保の拠点として期待されるのは、「立法の定めたルールに従って行政が業務を遂行したことを証拠立てる記録を残す」という機能を持つからである。民主党政府の「事業仕分け」だけでなく、地方自治体においても事業の見直しが進められているが、アーカイブズに対する外部監査が上記の視点をどの程度もちつつ行なわれているかについて、京都、北海道など代表的な事例をもとに検討し、必ずしもそうした視点が十分ではなく、経費削減に偏した監査が今後も行われる危険があることを示した。</p>	<p>33 - 47 頁</p>
<p>17. 政府機関横断的な記録管理に必要なもの—オーストラリア・ヴィクトリア州の公文書管理法成立前夜—</p>	<p>単著</p>	<p>2010. 3. (平成22年3月)</p>	<p>『国文学研究資料館紀要 アーカイブズ研究篇』第5号(通巻40号)</p>	<p>政府機関横断的な記録管理システムが整備されるには、(1)記録が業務遂行中の参照のため、業務完了後の説明のためという両面で重要なこと、(2)記録管理はそれを通じて政府各機関の業務スタイルを管理することにつながり、一方的な押しつけは困難なこと、この2点の理解が重要である。これについて記録管理スタイルの標準化の途上であった20世紀半ばのオーストラリア・ヴィクトリア州の事例に即して検討し、アーカイブズ機関の設立がこの2点の解決と結び</p>	
<p>18. 情報処理から情報発信へ—高野山大学での情報教育—</p>	<p>単著</p>	<p>2010. 3. (平成22年3月)</p>	<p>『密教学会報』第48号</p>	<p>高等学校の普通教科において2003年より情報教育が必修となったことを受け、本学における情報教育がどのように対応したかを概観し、それを踏まえ、そうした基礎的な情報教育の上に本学独自の情報教育がどのようにあるべきかについて論じた。特に専門教育の場で学習内容に即した情報技術の活用が望まれることを、その活用の萌芽的な例を見ることによって示した。</p>	<p>1 - 12頁</p>
<p>(その他) 《書評》 1. Mauss, Marcel, 1997, <i>Ecrits politiques: Textes reunis et presentes par Marcel Fournier</i>, Paris: Fayard.</p>		<p>2000. 12. (平成12年12月)</p>	<p>『ニューズレター』第1号 デュルケム／デュルケム学派研究会</p>		<p>5-7頁</p>

2. 佐藤博樹・石田浩・池田謙一 (編)『社会調査の公開デー ター2次分析への招待』東京 大学出版会、2000年。		2003.3. (平成15 年3月)	『記録と史料』 第13号 全史料協		58-61頁
3. 荻野昌弘(編)『文化遺産の 社会学—原爆ドームからルー ブル美術館まで』新曜社、 2002年。		2004.3. (平成16 年3月)	『記録と史料』 第14号 全史料協		83-87頁
4. 原田正純・花田昌宣(編) 『水俣学研究序説』藤原書 店、2004年。		2006.3 (平成18 年3月)	『記録と史料』 第16号 全史料協		62-64頁
5. 荻野昌弘『零度の社会』世界 思想社、2005年。		2006.5 (平成18 年5月)	『ソシオロジ』 第156号 社会学研究会		199-203 頁
6. デジタルアーカイブ推進協 会(編)『デジタルアーカイ ブ白書2005』デジタル アーカイブ推進協議会、2005 年		2007.3 (平成19 年3月)	『記録と史料』 第17号 全史料協		41-44頁
7. 木下敏之『日本を二流IT国家 にしないための十四カ条』日 経B P、2006年		2008.3 (平成20 年3月)	『記録と史料』 第18号 全史料協		68-71頁
《翻訳》					
1. ジャン・カズヌーヴ『マルセ ル・モースの社会学』(未発 表) (Jean Cazeneuve, Sociologie de Marcel Mauss, PUF, 1968)					
《報告と展望》					
1. 高野山におけるデジタルアー カイブ—高野山大学の取り組 みを中心に	単著	2003.3. (平成15 年3月)	『密教文化』 第210号 密教研究会		1-30頁
2. 報告：国際社会学機構第38回 会議	単著	2008.11 (平成20年)	『アーカイブズ学 研究』9、日本 アーカイブズ学会		84 - 89 頁
3. 第38回国際社会学機構世界会 議参加記 レギュラーセッション 'Archives, Accountability, and Democracy in the Digital	単著	2009.3. (平成21 年3月)	『記録と史料』 19、全国歴史資料 保存利用機関連絡 協議会		22 - 26 頁
《学会発表》					
1. モースにおける「往時」と 「現代」—「贈与論」におけ る同時代への提案をめぐって		1997.11 (平成9年11 月)	第70回日本社会学 会	一般研究報告	
2. 近代社会における『気前のよ さ』—モースによる同時代へ の発言をもとに		2002.9. (平成14 年9月)	第5回 デュルケーム/ デュルケーム学派 研究会	研究報告	

3. 高野山古地図を利用した自己増殖的デジタル教材の作成	2002.10 (平成14年10月)	平成14年度 情報処理教育研究 集会 (東京大学)	分科会報告
4. 整理と公開をめぐって一誰が、どのようにして、誰のために	2002.12 (平成14年12月)	公開シンポジウム 情報社会と archives 一図書館・文書 館・ 博物館をめぐって (国文学研究資料 館 史料館)	シンポジウム報告
5. マルセル・モースのナショナリズム論	2003.5. (平成15年5月)	関西社会学会 第54回大会	一般研究報告
6. 高野山古地図をデジタル画像でみる	2003.5. (平成15年5月)	密教研究会 平成15年度大会 (高野山大学)	テーマ報告
7. 高野山古地図を利用した画像資料と文字資料の融合	2003.9. (平成15年9月)	平成15年度 大学情報化全国大 会 (東京私学会館)	分科会報告
8. マルセル・モースと協同組合運動—「われわれの社会」における「気前のよさ」をめぐって	2003.10 (平成15年10月)	日本社会学会 第76回大会	一般研究報告
9. 「庶民」の連帯—モースの社会構想	2003.10 (平成15年10月)	日仏社会学会 2003年度大会	シンポジウム報告
10. 巨大曼荼羅図のデジタル化と活用	2003.11 (平成15年11月)	平成15年度 情報処理教育研究 集会 (北海道大学)	分科会報告
11. フランスにおける文書館学の展開	2004.2. (平成16年2月)	科学研究費補助 金・基盤研究 (A) (1) 「歴史情報 資源活用システム と国際的アーカイ ブズネットワーク の基礎構築にむけ ての研究」アーキ ビスト養成機関情 報収集プロジェクト 研究会	研究報告
12. 高野山古地図を利用した自己増殖的デジタル教材の作成	2004.7. (平成16年7月) 一次選考 2004.9. (平成16年9月) 二次選考	平成16年度 情報処理教育方法 研究集会 (東京私学会館)	論文掲載のための報告審査会

13. 視覚資料デジタル化の効果と 課題 —高野山古地図を事例として—	2004.12 (平成 16年12 月)	平成16年度 全史料協近畿部会 古文書研究会 (奈良県女性会 館)	研究報告
14. 歴史資料活用におけるデジタ ル技術の役割—高野山大学の 取り組みを事例として—	2006.4. (平成18 年4月)	日本アーカイブズ 学会2006年度大会	研究報告
15. 史料保存機関をめぐる最近の 動向について	2006.6. (平成18 年6月)	全史料協近畿部会 近世古文書研究会 第79回研究会	研究報告
16. 電子ネットワーク時代の文書 管理—オーストラリア・ヴィ クトリア州を事例として—	2006.7. (平成18 年7月)	全史料協近畿部会 公文書研究会 第32回研究会	研究報告
17. Cultural Heritage and Digital Technologies	2006.9. (平成18 年9月)	高野山国際密教学 術大会	研究報告
18. ヴィクトリア州立公文書館の VERSについて	2006.12 (平成 18年12 月)	日本アーカイブズ 学会/科学研究費 「歴史情報資源活 用システムと国際 的アーカイブズ・ ネットワークの基 礎構築にむけての 研究」共催研究集 会	研究報告
19. デジタル技術を利用した歴史 資料活用の試み—高野山大学 を事例として—	2006.12 (平成18年 12月)	地域資料シンポ第 9回準備研究会	研究報告
20. 高野山古地図を利用した自己 増殖的デジタル教材作成の研 究	2007.3. (平成19 年3月)	新生わかやま共同 研究支援事業成果 報告会	研究報告
21. 現物資料のデジタル化とCG による仮想再建	2007.10 (平成19年 10月)	シンポジウム「仏 教関連資料のデジ タル化の現状と將 来」	研究報告
22. ネットワーク時代のアーカイ ブズ—アカウンタビリティ確 保の拠点として—	2007.10 (平成19年 10月)	国文学研究資料館 アーカイブズ研究 系プロジェクト研 究会	研究報告
23. ヴィクトリア州公文書館にお ける記録管理について	2008.2. (平成20 年2月)	全史料協近畿部会 例会第94回	研究報告
24. Regular session 'Archives, Accountability, and Democracy in the Digital Age'	2008.6. (平成20 年6月)	The 38th World Congress of the International Institute of Sociology	セッション座長

学会等および社会における主な活動 (藤吉)	
2001年9月 (平成13年9月)	デュルケーム/デュルケーム学派研究会 in 高野山受入
2001年10月 (平成13年10月)	「高野惣山之絵図」デジタル画像上映会 (高野町役場)
2002年3月 (平成14年3月)	「高野惣山之絵図」デジタル画像上映会 (和高社研)
2002年4月 (平成14年4月)	「高野惣山之絵図」デジタル画像上映会 (高野町商工会館)
2002年6月～11月 (平成14年6月-11月)	「高野惣山之絵図」デジタル画像上映会 (和歌山県立橋本高校、耐久高校、伊都高校、大成高校、箕島高校、 和歌山北高校)
2002年7月 (平成14年7月)	「高野惣山之絵図」デジタル画像上映会 (紀淡海映交流会議)
2002年8月 (平成14年8月)	「高野惣山之絵図」デジタル画像上映会 (和歌山県立高校書道連盟夏期合宿研修講演)
2003年4月 - 2005年3月 (平成15年4月-平成17年3月)	新生わかやま共同研究支援事業助成研究代表者 (研究題目: 高野山古地図を利用した自己増殖的デジ タル教材の作成)
2003年4月 - 2007年3月 (平成15年4月-平成19年3月)	平成15～18年度科学研究費補助金 基盤研究 (A) (1) 共同研究者 (研究題目: 歴史情報資源活用システムと国際的アーカイブズネット ワークの基盤構築に向けての研究)
2003年8月 (平成15年8月)	「高野惣山之絵図」デジタル画像上映会 (和高国研)
2003年10月 (平成15年10月)	わかやまアーカイブチャンネル審査委員 (和歌山県より委嘱)
2003年11月 (平成15年11月)	「高野惣山之絵図」デジタル画像上映会 (和歌山インフォフェア)
2003年12月～ (平成15年12月～)	高野山真言宗 IT 事業推進委員
2004年4月～(平成16年4月～)	全国マルチメディア祭 in わかやま実行委員
2005年4月～(平成17年4月～)	和歌山県教育iDC (internet Data Center) 委員
2004年9月25日 - 26日 (平成16年9月25-26日)	高野山カンファレンス 2004 (デュルケーム・デュルケーム学派研 究会合同研究会) in 高野山受入れ
2005年4月～(平成17年4月～)	全史料協近畿部会運営委員 (現在に至る)
2005年7月～(平成17年7月)	オーラルヒストリーの会事務局
2006年4月～2007年3月 (平成18年4月-平成19年3月)	大学等地域貢献促進事業助成研究 研究代表者 (研究題目: 3DCGを用いたインタラクティブな高野山立体地図作成の 研究)
2006年4月 (～2009年3月予定) (平成18年4月 - 平成21年3月 予定)	平成18～20年度科学研究費補助金 基盤研究 (B) 研究代表者 (研究題目: オーストラリアと日本の自治体における業務記録管理シ ステムの比較研究)
2006年5月～(平成18年5月～)	高野山まちづくり研究会メンバー (ウェブサイト担当) (現在に至る)
2007年11月2日 - 3日 (平成19年11月2-3日)	日仏コローク in 高野山受入れ
2009年4月 - 2013年3月 (平成21年4月-平成25年3月)	科学研究費補助金 基盤研究 (B) 研究代表者 研究題目: 国際比較に基づくアーカイブズと社会の関係に関する総合 的研究
大学行政への係わり (所属委員会)	
平成13年度 (2001年)	自己点検基本事項検討委員会 学生募集対策委員会 同和研究会 情 報処理委員会

平成14年度(2002年)	自己評価点検委員会 情報処理委員会 学生募集対策委員会 学生部協議会 図書館協議会 大学生協監事
平成15年度(2003年)	情報処理委員会(委員長) 自己評価点検委員会 学生部協議会 リエゾンオフィス 学生募集対策委員会(年度途中より委員長) 選挙管理委員会 図書館協議会 大学生協監事
平成16年度(2004年)	情報処理委員会(委員長) 自己評価点検委員会 リエゾンオフィス 学生募集対策委員会(委員長) 図書館協議会 選挙管理委員会 大学生協監事
平成17年度(2005年)	情報処理委員会(委員長) 自己評価点検委員会 リエゾンオフィス 学生募集対策委員会(委員長) 図書館協議会 選挙管理委員会 大学生協監事
平成18年度(2006年)	共通教育センター主任 情報処理委員会 自己点検・評価検討委員会 リエゾンオフィス 学生募集対策委員会 図書選択委員 大学生協監事 同和研究会 入学試験委員会 教務委員会 FD問題検討会議 創立120周年記念事業委員
平成19年度(2007年)	共通教育センター主任 学生募集戦略本部 図書館協議会 大学生協理事長 科目等履修生選考会議 カリキュラム検討委員会 GP課程本部
平成20年度(2008年)	共通教育センター主任 学生募集戦略本部 自己評価点検委員会 大学生協理事長 戦略的大学連携支援事業 コンソーシアム和歌山 質の高い大学教育推進プログラム本部
平成21年度(2009年)	企画・広報委員会 人権研究会 大学生協理事長 戦略的大学連携支援事業担当 コンソーシアム和歌山担当 質の高い大学教育推進プログラム本部
平成22年度(2010年)	企画・広報委員会 人権研究会 IT管理委員会 戦略的大学連携支援事業担当 コンソーシアム和歌山担当 大学生協理事長

所属	文学部	職名	助教授	氏名	藤吉圭二	大学院の授業担当の有無 (有・無)
教育活動						
教育上の主な業績		年月日	概 要			
1. 教育内容・方法の工夫 板書のさいの配慮		1998年4月～ (平成10年4月～)	<ul style="list-style-type: none"> ・板書は大きく読みやすい字で書くように心がけている。基本的には「そのままノートに写せば授業内容のまとめとなる」ように、かなりの分量を板書する。また「講義のポイントとしてきちんとノートしてほしい内容の板書」と「講義の中で副次的に触れるやや脱線した内容の走り書き」とは区別して板書するようにしており、板書の見やすさに関しては一定の評価を学生から得ている。 			
解説のさいの配慮		1998年4月～ (平成10年4月～)	<ul style="list-style-type: none"> ・解説時には大きく明瞭な発話を心がけている。ただし、ゆっくり話すと間のびしてかえって聴き取りにくくなり、また授業時間内に盛り込める内容も制限されるので、どちらかというとも早口で話し、重要なポイントについては簡潔にゆっくり繰り返すという方法で解説を進めている。 			
予習用「宿題プリント」の作成		1998年4月～2006年3月 (平成10年4月-平成18年3月)	<ul style="list-style-type: none"> ・2回生向けの学科必修講義では、あらかじめ毎週の講義で読んでいくテキストの範囲を指定し、その範囲内で重要な内容について受講前に該当部分を読んでまとめ、授業時に提出するという「宿題プリント」を毎週の課題とし、採点のうえ返却し授業理解の補助にするとともに復習の手がかりとなるよう配慮している。また採点の際には内容的な面だけでなく、文章としてのまとまり、誤字脱字、文字の丁寧さなどについても必要に応じてコメントを付し、学生の注意を喚起するよう心がけた。さらに後期には宿題プリント作成にあたり手書きではなくパソコン出力を義務づけ、ワープロソフトの利用、プリントアウトの割付などに習熟することができるよう心がけている。 			
卒論作成のサポート		2000年4月～2006年3月 (平成12年4月-平成18年3月)	<ul style="list-style-type: none"> ・4回生向けの学科必修演習では、4月から準備を始めて12月中旬までには卒業論文が仕上がるといって早め早めにスケジュールを示して作成を促している。授業期間中はもちろん、夏季休業中に宿題として参考文献の抜き書きを数ページ分つくり、それを自分の関心に応じて分類して見出しをつけるという作業を課し、秋以降それをもとに卒論の構成および執筆に戸惑いなく取りかかれるような誘導をかけている。 			
要約問題の活用		1999年4月～2006年3月 (平成11年4月-平成18年3月)	<ul style="list-style-type: none"> ・2回生向けの学科必修講義では、毎週講義の前半でその時間のポイントを解説し、後半にテキストの一定の範囲を指定してその内容を要約するという課題を課している。目標は、内容の理解は基本的な前提として「限られた時間の中でテキストの内容を把握し、一定水準の簡潔な説明を作成する」ということに置いている。毎回つぎの授業時に採点のうえ返却し、再度要約すべきテキストの内容を解説して復習を心がけている。この方法によってテキストに書かれた必要事項、および原稿用紙使用時の注意事項の定着がはかられている。 			

休暇時レポート課題の活用	1998年4月～2006年3月 (平成10年4月-平成18年3月)	・どの授業においてもできるだけ夏季休暇、冬季休暇中にレポート課題を課している。その目標は関連分野への知識・関心を広める、およびレポート作成を通じてワープロによる文書作成およびプリントアウトの設定に慣れるという2点に置いている。
パソコン活用のためのサポート	1998年4月～ (平成10年4月～)	・地域的な問題、あるいは本人が不慣れであったりしてIT関連の情報・サポートが容易には得られない学生が多いため、要望があればパソコン購入の相談にのったり、インターネットプロバイダとの契約についてアドバイスしたりということを意識的にやり、また授業時にサポートの必要な場合は問い合わせるようにとアナウンスを行なっている。また独自に購入したタイピング練習用ソフトを使って、研究室で希望する学生に練習の時間を提供している。
卒論のための資料収集法の教示	2001年4月～2006年3月 (平成13年4月-平成18年3月)	・課題演習(卒論ゼミ)においては、年度始めの早い時期にインターネットを利用した資料検索およびインターネット上での図書館蔵書検索の方法を提示し、大学の地理的な面にかかわる資料収集の不便さをできるだけ緩和するように心がけている。
学習内容の現実社会との関連づけへの配慮	2004年4月～2006年3月 (平成16年4月-平成18年3月)	・「経済学/暮らしと経済」においては、授業で解説する経済学の諸項目と現実の社会における経済活動とを関連づけて理解することを容易とするために、新聞に掲載されている株価表を利用して「株の売買ゲーム」を実施した。これにより株価の上下、企業評価の上下、当該業種の好不況、そして日本経済の好不況が相互に密接に関連することへの理解を深めるとともに、名前しか知らないような大企業の活動への興味・関心を高めることにも活用できた。
2. 作成した教科書、教材、参考書	1998年～2006年3月(平成10年-平成18年3月) 1998年～2006年3月(平成10年-平成18年3月) 2003年4月～(平成15年4月～) 2004年4月～2006年3月(平成16年4月-平成18年4月) 2005年4月(平成17年4月)	・卒論作成のてびき(毎年少しずつ改訂) ・宿題プリント(2回生向け講義、毎年少しずつ改訂) ・復習プリント(フランス語) ・株価推移表、株価売買表(経済学/暮らしと経済) 新入生向け「日本語」テキスト
日本語Ⅰ・Ⅱ		
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		

発表： 高野山古地図を利用した自己増殖的デジタル教材の作成	2002年10月(平成14年10月) 平成14年度情報処理教育研究集会(東京大学)	本学所蔵にかかる高野山古地図をデジタル画像化するという作業を通じ、従来は利用の困難だった貴重な文化財を利用して教育・研究活動を活性化するという試みを報告した。
発表： 高野山古地図をデジタル画像で見る	2003年5月(平成15年5月) 密教研究会(高野山大学)	本学所蔵にかかる高野山古地図をデジタル画像化することによって、高野山史研究においていかなるメリットを期待できるかという点について報告した。
発表： 高野山古地図を利用した画像資料と文字資料の融合	2003年9月(平成15年9月) 平成15年度大学情報化全国大会(東京私学会館)	本学所蔵にかかる高野山古地図をデジタル画像化し、従来は気軽に閲覧できなかった貴重な文化財を教育・研究の場で活用できるようになったこと、さらには画像に解説の文字ボックスを適宜付加していくことにより、画像資料をひとつのインデックスとして高野山史研究を促進することが可能であるという点について報告した。
発表： 巨大曼荼羅図のデジタル化と活用	2003年11月(平成15年11月) 平成15年度情報処理教育研究集会(北海道大学)	チベット、ムスタン地区の寺院壁画として描かれた巨大曼荼羅図の撮影写真をデジタル化して教室で上映すると、教材としての利用が容易になり、曼荼羅世界に関する理解が深まること、また画像内に解説の文字ボックスを付加していくことによって教材としての画像の価値をさらに高めることができることを報告した。
公開授業： 社会講義 I	2003年(平成15年)	・学内FD委員会主催による公開授業実施(学科2回生向け社会講義 I)
講演： 「情報教育・教育の情報化」研修会	2004年1月(平成16年1月) 和歌山大学教育学部教育実践総合センター(和歌山県立図書館)	・デジタルコンテンツを利用した教育方法の開発について、小中学校現場の先生方とともにパネルディスカッションをつとめ、藤吉はコンテンツ作成の立場から大学現場はコンテンツ作成そのものが教育活動と密接にリンクしていることについて事例を挙げて説明した。
講演： 「高野山古地図」から歴史を読み解く」—インターネットによって変わる「歴史資料のかたち」—	2004年12月(平成16年12月) きのくに県民カレッジ(和歌山県立図書館)	世界遺産登録にからめて高野山の紹介を行ない、デジタル化された歴史資料のインターネット上での公開の意義について解説した。主な内容は以下の通り。 ・インターネット上での公開を前提とした歴史的資料(絵図、建築物、文書等)のデジタル化について ・高野山の歴史に関する講話(「絵図」を通じて分かる空間構造の変化など) ・インターネットの普及と変化する歴史資料のかたち—高野山を事例として
4. その他教育活動上特記すべき事項		
非常勤講師	～2000年(～平成12年)	四天王寺国際仏教大学(社会学入門・外書講読)
資料デジタル化による教育・研究活動の活性化	2001年～(平成13年～)	学内資料のデジタルアーカイブ化を踏まえた教育・研究活動の活性化

高大連携授業	2003年(平成15年)	和歌山県立伊都高校での福祉・社会一般授業への出講
放送大学わかやま学習センター面接授業講師	2005年2月(平成17年2月)	「アーカイブとIT」というテーマでインターネットの普及前提とした文化遺産公開の取り組みについて解説